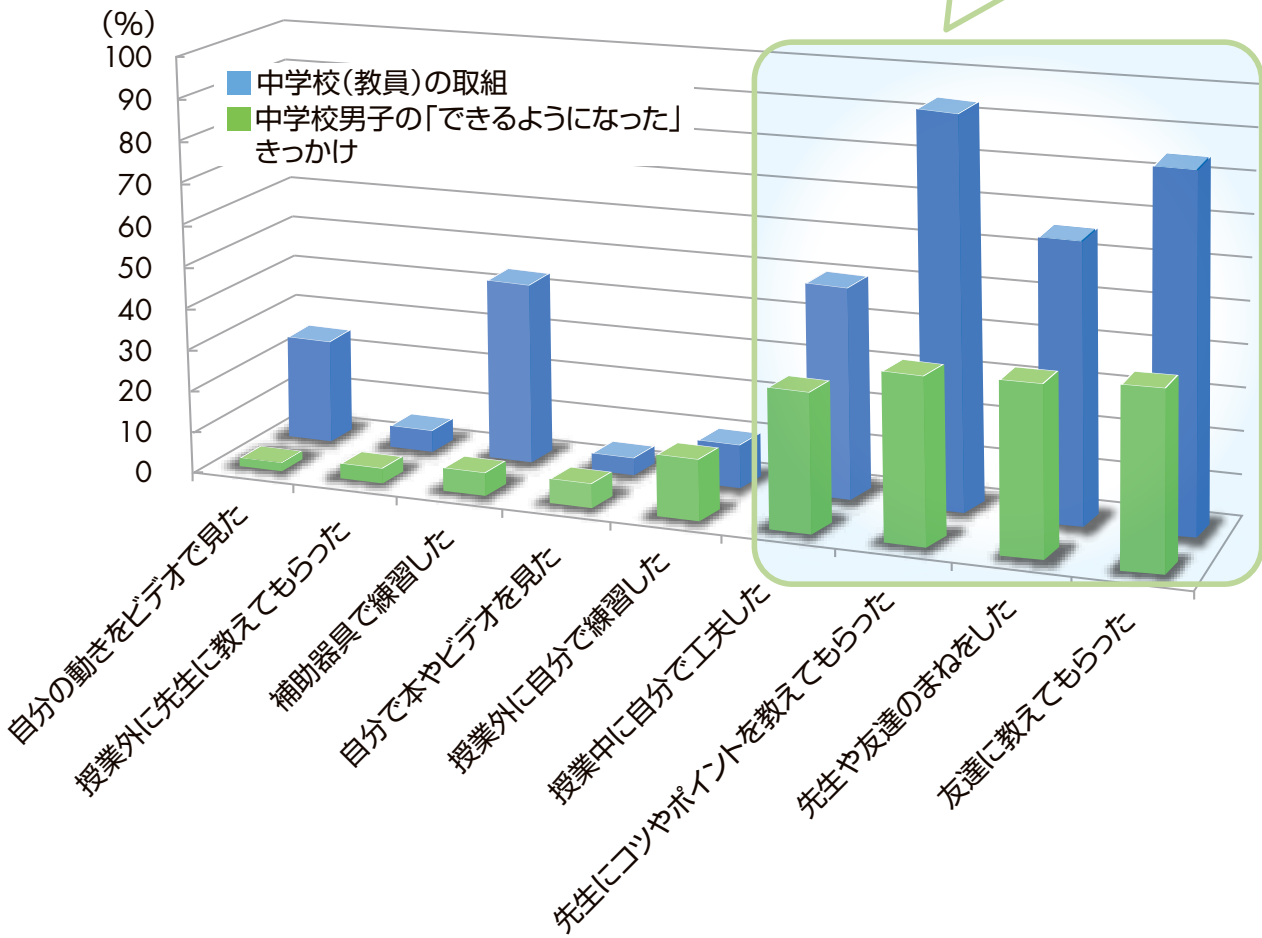


■「できるようになった」きっかけと学校の取組 (中学校男子)

中学校2年生男子の、保健体育の授業で「できなかったことができるようになった」きっかけの上位4項目は、保健体育の授業で努力を要する生徒がいる場合の学校（教員）の取組内容においても上位を占めた。中学校女子、小学校男女でも同様の傾向がみられた。

学校の指導上の取組と生徒の「できるようになった」きっかけがともに高かった項目



※項目は生徒質問紙による

	のべ回答数
■ 中学校(教員) (学校質問紙)	40,179
■ 中学校男子 (生徒質問紙)	997,009

中学校2年生男子の、保健体育の授業で「できなかったことができるようになった」きっかけと、中学校(教員)の、保健体育の授業で努力を要する生徒がいる場合の取組(いずれも複数回答可)を比較した(→p.131 児童19/p.161 生徒20/p.175 学校18)。

過去の調査結果からも、「運動やスポーツに対する意識」「運動時間」「体力・運動能力」は密接に関係し合っていることがわかっている。小学校で9割以上、中学校で8割以上の児童生徒が、体育・保健体育の授業は「楽しい・やや楽しい」と答えてい

ることから、体育・保健体育の学習の充実を図ることは体力の向上への近道といえよう。体育・保健体育の学習を楽しみと感ずることで、運動やスポーツが好きになり、運動やスポーツに親しみ、知識や技能を身に付け、結果として体力の向上につながるというプラ

スの循環を生み出すことが大切である。

事例では、6年間に及ぶ系統的な運動を通じて「できる喜び」を実感させたり、タブレット等で運動フォームを「見える化」したりして、児童生徒の主体性を育成する学校の取組を紹介する。

| テーマ |

2

体育・ 保健体育の 授業の充実

体育・保健体育の授業は、誰もが運動やスポーツに触れる機会として、児童生徒の健康の保持増進、体力の向上、豊かなスポーツライフの実現に中心的な役割を果たしている。体育・保健体育の授業の実態、児童生徒の体育・保健体育の授業への意識や取り組み方を明らかにし、体育・保健体育の授業をさらに充実させるためのポイントを探った。

体育・保健体育の授業の状況

体育・保健体育の授業の 目指すもの

小学校学習指導要領解説には、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」という目標に基づき、「児童の能力・適性、興味・関心等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習が重要である」と明記されている。中学校においてもこれに準じた目標が掲げられている。

現行の学習指導要領の全面実施か

ら小学校では4年目、中学校では3年目となり、体育・保健体育の授業はどのように取り組まれているのだろう。

教材の活用

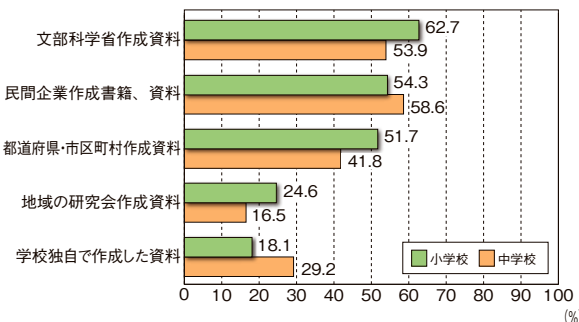
授業や教材等の研究で使用する資料について、小学校では「文部科学省作成資料」「民間企業作成書籍、資料」「都道府県・市区町村作成資料」、中学校では「民間企業作成書籍、資料」「文部科学省作成資料」の順で多く利用されていた。文部科学省発行のデジタル教材等が活用されているものと考えられる(図2-1)。しか

し教材としては、書籍や資料が主であり、ICT機器を活用している学校は小学校で33.2%にとどまった一方、中学校では49.1%と半数近くに上った(→p.175 学校15)。ICT機器は児童生徒が自分の動きを確認したり、あとで内容をふり返ったりする上で有効である。特に中学生は、生徒同士でICT機器を操作することが比較的容易なこともあって、活用率が高くなっているのではないだろうか。

教材の特性を踏まえ、必要に応じて効果的に活用することにより、授業の充実に役立てることが大切である。



【図2-1】 授業等で活用している資料 (学校18)



「目標」と「ふり返り」

体育・保健体育の授業の冒頭に、その授業の目標を児童生徒に計画的に示す活動を「取り入れている」と回答したのは、小・中学校ともに95%以上であった(→p.174 学校11)。小・中学校ともに、児童生徒はめあてやねらいに沿って学習に臨んでいるものと考えられる。また、体育・保健体育の授業の最後に、その授業で学習したことをふり返る活動を「取り入れている」と回答したのは、小学校で88.6%、中学校で92.3%であった(→p.174 学校12)。PDCAサ

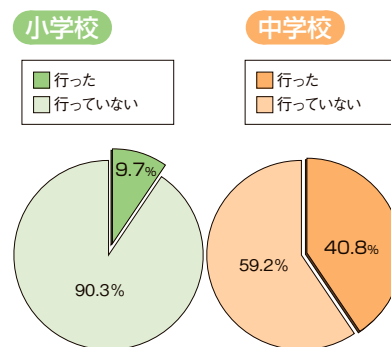
イクルを意識した学習が進められていることがうかがえる。

研修、研究授業

指導方法の研修を受ける機会があった領域は、小学校では「体づくり運動」が最も多く58.9%であった(→p.177 学校21)。現行の学習指導要領に「多様な動きをつくる運動(遊び)」が初めて導入されたことも起因していると考えられる。中学校1・2年生では全領域が必修となったが、特に武道で85.8%、ダンスで73.7%と、研修の機会が多くもたれていることがわかった。

また、体育・保健体育の研究授業を実施したのは、小学校で9.7%、中学校で40.8%であった(図2-2)。

【図2-2】 体育・保健体育の研究授業の実施 (学校17)

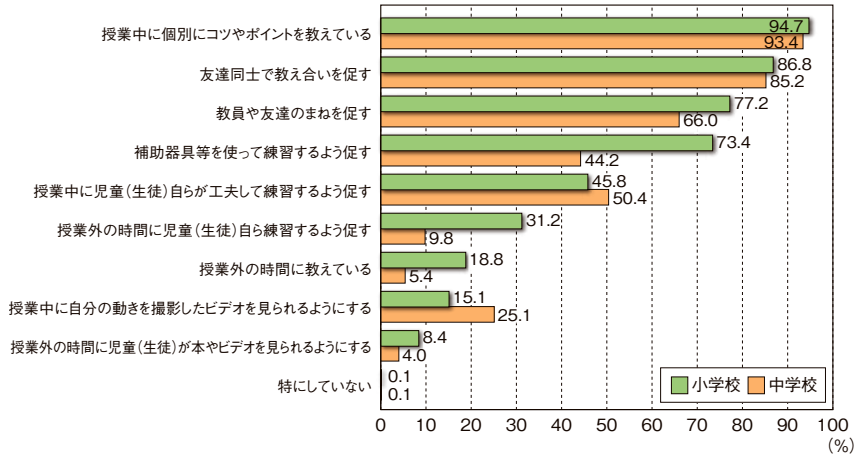


「楽しさ」を味わえるようにする手立て

児童生徒の能力・適性、興味・関心等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わえるようにするために、体育・保健体育の授業で努力を要する児童生徒に対して、教員はどのような取組を行っているのだろうか。

調査結果をみると、小・中学校ともに「授業中に個別にコツやポイントを教えている」「友達同士で教え合いを促す」「教員や友達のまねを促す」の順で多く、次いで、小学校では「補助器具等を使って練習するよう促す」、中学校では「授業中に生徒自らが工夫して練習するよう促す」が多かった(図2-3)。これらの手立

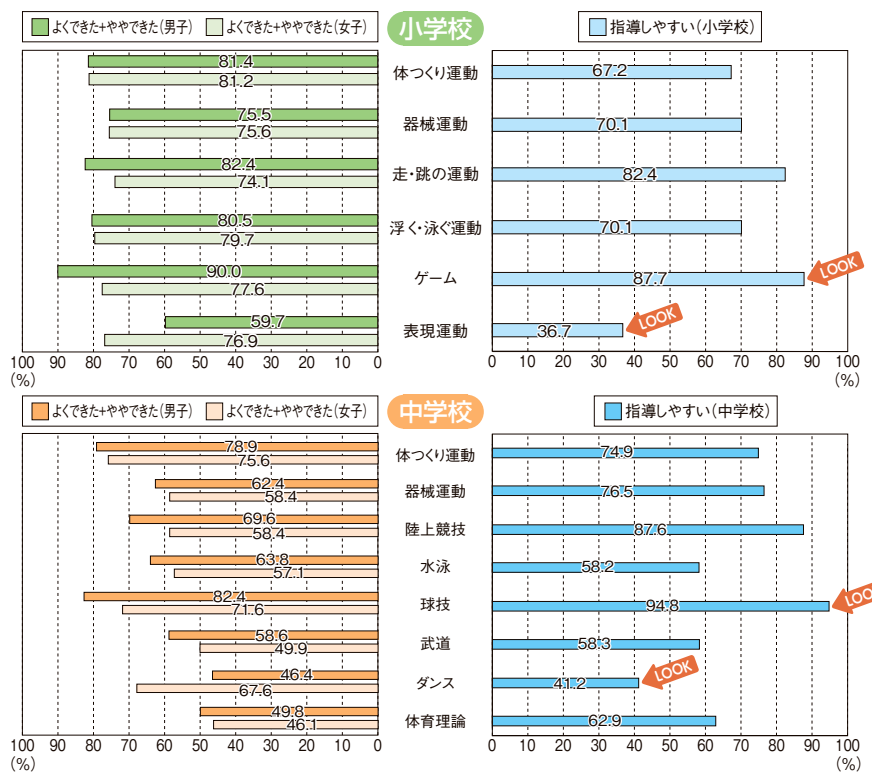
[図2-3] 体育・保健体育の授業で努力を要する児童生徒への取組(学校18)



ては児童生徒が授業で「できなかったことができるようになったきっかけ」とも一致しており(→p.131 児童19/→p.161 生徒20)、教員が発達の段階に応じて手立てを工夫し、成果を上げているようすがうかがえる。

また、授業において児童生徒同士で助け合うことを大切にしている学校は、小・中学校ともに100%に近く(→p.175 学校16)、体育・保健体育の授業を通じた協同的な学びが大切にされていることがわかった。

[図2-4] 領域別にみる児童生徒の「よくできた・ややできた」と教員の指導しやすさ(児童13~18/生徒12~19/学校20)



※領域名は児童/生徒質問紙による

教員の思いと児童生徒の思い

教員が「指導しやすい」と感じている領域は、児童生徒にとっても「できた感」が高い傾向がみられる。一方、教員が「指導しやすい」と思う割合の低い領域であっても、児童生徒の「よくできた・ややできた」の回答は必ずしも低くない(図2-4)。また、多くの児童生徒がほとんどの領域において、授業で「もうやりたくない」よりも「もう一度授業でやりたい」を選択している(→p.130 児童13~18/→p.160 生徒12~19)。これらは、児童生徒が領域の特性に触れる楽しさを味わうことができるよう、教員が授業づくりを工夫している結果ではないかと推測される。

体育・保健体育の授業の充実に向けて ～児童生徒の意識から～

授業の楽しさ

体育・保健体育の授業における取組の成果を、児童生徒の質問紙からみてみよう。

「体育・保健体育の授業は楽しいですか」に対し、「楽しい・やや楽しい」の回答が、小学校は男女とも90%を超えた。中学校は、男子88.9%、女子82.6%と総じて高いものの小学生よりは低く、特に女子に開きがみられた。中学校女子の運動離れに歯止めをかけるためにも、誰もが「楽しい」と思える授業を工夫することが考えられる(図2-5左)。

領域ごとにみると(図2-6)、小学校は男女ともにほとんどの領域で80%以上の児童が「楽しかった・やや楽しかった」と回答した。しかし、「できたか」に対しては、「体づくり運動」のみ、男女とも80%以上の児童が「よくできた・ややできた」と回答したのに対し、器械運動のように技能的に「できる・できない」がはっきり表れる領域については、自己評価が低かった。また、「走・跳の運動」では男子が女子よりも高く、「表現運動」では女子が男子よりも高いという男女差がみられた。

中学校では、「楽しかったか」に対し「楽しかった・やや楽しかった」と回答した生徒が、「球技」のみ80%以上であったが、他の領域はおおよそ35~70%にとどまった。男女差が10%以上ある領域は、「陸上競技」と「ダンス」である。技能的指導が多くなる中学校では、「できたか」に対し「できた・ややできた」と回答した生徒は、「体づくり運動」「球技」で70%以上であったが、他

の領域は全て70%を下回った。男女差が10%以上ある領域は、「陸上競技」「球技」「ダンス」である。

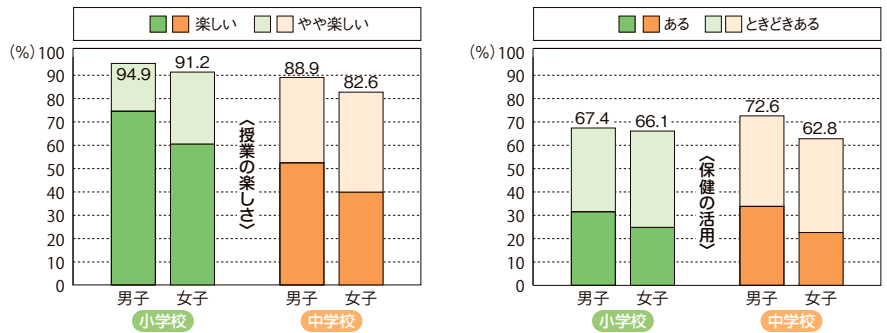
保健で学んだことの実社会への活用

保健の学習は、自らの健康の保持増進を図る資質や能力を育む上で重要な役割を担っている。保健の授業で学んだことを、授業や運動・スポーツを行う時に思い出したり、使った

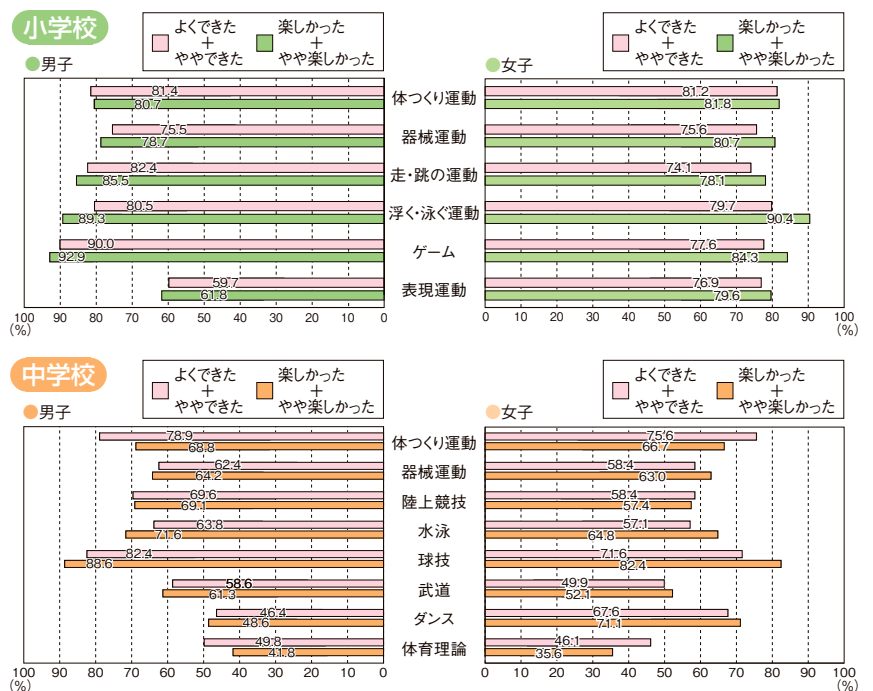
りすることについては、60~70%の児童生徒が「ある」「ときどきある」と回答した(図2-5右)。男子では、小学生より中学生のほうが活用できている傾向がみられた。

多くの児童生徒が体育の授業に楽しさを感じていることから、授業で得られる知識を活用した学習活動を取り入れるなど、保健と体育の関連を図る指導方法を工夫し、一層の保健の学習の充実を図りたい。

[図2-5] 児童生徒の体育・保健体育の授業の楽しさと保健で学んだことがらを思い出したり使ったりする割合(児童12・22/生徒11・23)



[図2-6] 領域別にみる児童生徒の「よくできた・ややできた」「楽しかった・やや楽しかった」割合(児童13~18 (1) (2) / 生徒12~19 (1) (2))



「できるようになる」きっかけ

体育・保健体育の授業で「できなかったことができるようになった」きっかけとしては、児童生徒とも、「友達に教えてもらった」「先生や友達のまねをしてみた」「授業中に先生に個別にコツやポイントを教えてもらった」などの回答が多かった(図2-7)。特に女子は、「友達に教えてもらった」の回答が多いのが特徴的である。児童は、他に「授業外の時間に自分で練習した」との回答も多くみられた。「できるようになったことがない」は、小・中学校ともに少なく、授業中の技能の習得が果たされていることがうかがえる。

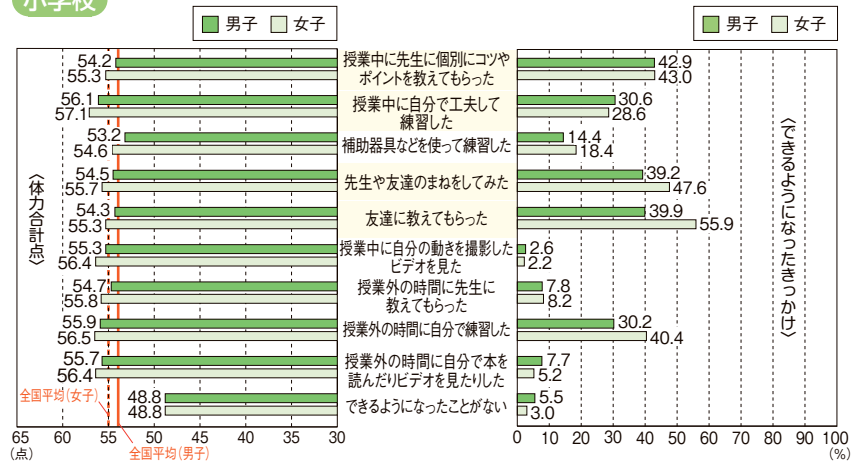
教員が児童生徒の学習状況を把握し、一人一人に適切なアドバイスをすることが大切である。領域に応じた達成のコツやポイントなどの効果的な言葉かけの仕方を知っておくことも大切である。

なお、体力合計点の高い児童生徒は、できるようになったきっかけとして「授業中に自分で工夫して練習

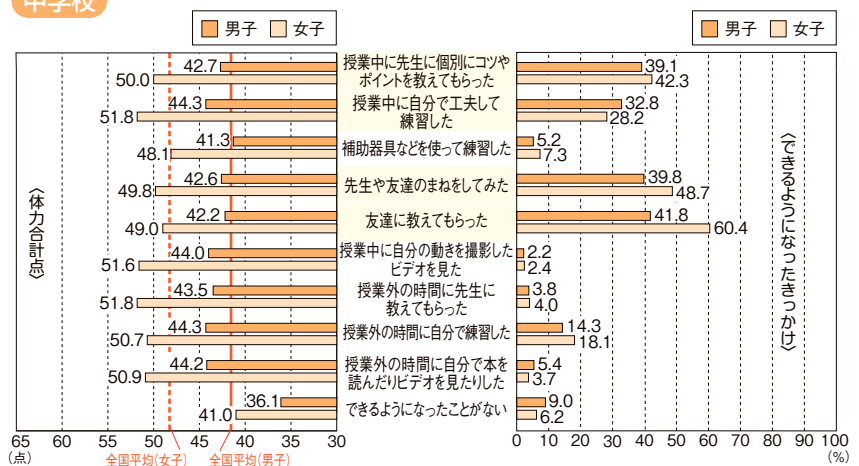
した」と回答した割合が高かった(→p.130 児童19/→p.160 生徒20)。主体的に考えながら、意欲をもって取り組んでいることがうかがえる。

[図2-7] 体育・保健体育の授業で児童生徒ができなかったことができるようになったきっかけと体力合計点(児童19・生徒20)

小学校



中学校



今後の課題

今年度の調査結果でも、依然、中学校女子の運動離れが大きな課題となっている。この改善のため、多くの教育委員会は、保健体育の授業や学校の体育活動の工夫等が必要だと考えていることが分かった(→p.183 教委7-2)。また、運動やスポーツが「きれい・ややきれい」な生徒の多くは、その理由に「授業でうまくできなかったから」をあげ

ている(→p.152 生徒1-2)。

以上のことから、体育・保健体育の授業の影響は大きく、児童生徒にいかにか運動に親しませ、いかに「できた」という経験を味わわせるかが、体力の向上と運動への意欲向上の糸口となる。教員はさらなる授業の充実のため、より多くの児童生徒が達成感を得られるよう、日々、授業の工夫改善に取り組んでいくことが大切である。

